楽なもも作りを目指して
～らくらく農園～

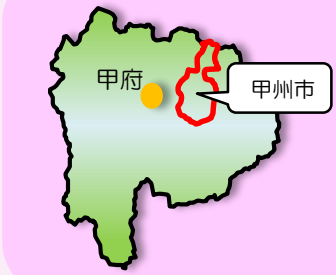
写真：らくらく農園のもも畑

らくらく農園設立

甲府盆地東部に位置する甲州市は、1年を通して果樹の生産が盛んに行われている地域で、夏はももやぶどうを、冬にはいちごやころ柿が作られています。甲州市の中心に位置する中萩原地区でも、もも作りが盛んに行われてきました。

しかし、担い手不足が深刻化していく中で「このままではこの産地は続かない」と感じた地域の農家が中心となり、中萩原地区の未来を守るため、集落農業組織「中萩原らくらく農業推進委員会」通称「らくらく農園」が平成8年に設立されました。現在では名称を変え「中萩原らくらく農業運営委員会」として活動しています。

設立された農園の「らくらく」には、効率の良い営農で、楽にもも作りをしたいという思いが込められています。



集落営農の導入

らくらく農園では集落営農によるもも作りを行っています。集落営農とは、ある一定の地域内の農家が農業生産を共同で行うことです。共同のオペレーターが大型機械を使い、農園全体の消毒散布や草刈り・苗木の移植を行い、個々の農家は管理作業のみに専念することができます。こうした工夫を用いることで、高齢者や女性、兼業の農家でも営農をすることができるようになりました。

↑消毒散布用
スピードスプレーヤ

↓苗木の移植用バックホウ

遊休農地を活用した苗木の移植

既存樹園地の基盤整備では、樹木を伐採する必要があり、整備完了後も苗木を一から育てなければなりませんでした。そこで、らくらく農園は基盤整備完了後すぐに営農できるよう遊休農地を借り、苗木を2～3年育て整備完了後移植を行うことで、移植の翌年から収穫できる仕組みを取り入れました。こうした取組みによって、基盤整備を行う上で課題となる成木に育つまでの未収穫期間を短縮することができます。現在基盤整備が進む農地でも、今年4月には約700～800本の大きく育てた苗木が移植される予定です。

遊休農地で育つ苗木

現在整備が行われている農地

らくらく農園のもも作り

らくらく農園では、ももの木の高さを約2～3ｍと抑えるため、横に大きく広がる樹形とし、樹木1本当たりの面積を広く取っています。高さが低くなったことで作業の安全性が向上し、横に広がったことで受光体制が良くなりおいしい果実を育みます。

現在は、日川白鳳・白鳳・川中島白桃など9品種を作っています。このように生産されたらくらく農園のももは、大藤の共選所に集められ、高品質な「大藤のもも」ブランドとして出荷されます。

日光を浴び大きく育つもも

らくらく農園　萩原委員長

もも作りへの思い

「高品質なももを作るために病害には特に気を付けています。収穫前の夏は防除作業を少なくし、収穫後の秋に満遍なく行うことで安定したももの収穫ができています。高品質なもも作りに重点を置き効率的な営農を行っているらくらく農園。個人ではなく地域のために行動した結果が今のもも作りに繋がっています。これからも、ゆったりとした営農を行い、『大藤のもも』として出荷していきたい。」とらくらく農園の萩原委員長は語ります。